



昭和幼稚園だより



2学期の録音、CD

毎学期園児達の歌声や楽器演奏を録音し、編集してCDにして各家庭に配布しています。年少～年中～年長と成長する姿も感じ取っていただけたら幸いです。観賞曲としてプロコフィエフ作の「ピーターとオオカミ」を入れてあります。ナレーションがあって、登場人物、動物の物語が「目に見えるように」聞こえてきます。ちょっと長いかもしれませんが、どうぞお子さんと一緒にお聞きください。

ことばの教育について

現在小学校の高学年で英語活動があり、2020年度からは3年生から始まるようです。「早く英語に馴染んだほうが良いのでは？」と思われる方もいらっしゃるでしょう。「早く始めれば、英語力がつく」とは幻想のようです。

＜子どもの英語にどう向き合うか 鳥飼玖美子著 NHK出版新書＞

＜英語教育幻想 久保田竜子著 ちくま新書＞

両書をお読みいただければ、焦って幼児期に英語活動を始めなくてもよいとお解りいただけます。

まず母語（私たちの場合日本語）がしっかり育つことが大切です。将来英語など他の言語を使えるようになる基礎です。日本語でしっかりと気持ちや思いを表したり、伝え合ったりすることです。

またヨーロッパでの英語学習・習得の調査・研究が紹介されています。小学校（8歳）から英語を学び始めたグループと中学校（13歳）から学び始めたグループの比較で、高校卒業時では両グループに顕著な差は見られなかった、そうです。日本でも幼児期・小学校から英語を学習したグループ、英語圏からの帰国子女のグループ、中学校から英語を初めて学習したグループでも中学校1年末での英語学力テストで差が全くなかった、そうです。12～13歳頃（中学校入学の頃）に認知的な飛躍があり、それ以前と以後では言語に限らず色々な面での認知、習得に大きな変化が生じています。小学校段階とは異なった方法で習得していくことが定着という

ものになっていくのでしょうか。（だから学校体系でも中学校～高等学校が小学校と区別されて存在するのです。）

習得にとって大切な要素は「必要性・動機（モチベーション）」と学習時間です。英語がなくても不自由のない日本の現状ではなかなか難しいことです。学校や塾などで英語の学習時間が終われば、ほぼ100%日本語の世界です。

英語をネイティブと同じように使えるようになるには徹底的な訓練が必要でしょう。日本人全員がネイティブと同じようになる必要があるのでしょうか？必要性を感じた一部の人が必要性を感じた時から徹底的な英語漬けの訓練を受ければよろしいのではないのでしょうか。外国人が日本語を習得した例としてアメリカ出身のタレントの「パッケン」。彼は23歳で来日して日本語を学習したそうです。また大相撲の外国人力士達。彼らは10代後半以降に来日して日本語を学習したのです。彼らは私達ネイティブな日本人となんら変わらなく日本語を使っています。また並みの日本人以上かもしれません。ネイティブと同様な英語を習得している日本人も多数います。彼らの大多数は幼児期から英語を学習した者より必要になった時期から訓練を始めた者でしょう。

幼児期になすべきこと

幼児期、小学校期は毎日の生活の中で母語である日本語の基本を全身で吸収していく大切な時期です。この時期の母語の力が土台となって将来の外国語の習得に力を発揮するのです。

家庭の中で親子、兄弟など家族と（日本語をもとにした）生活を通して、また幼稚園では教師、友達と（日本語をもとにした）様々な活動を通して日本語・諸々の成長を形成して行きます。特に幼稚園では、様々な人間に囲まれ、様々な環境に囲まれ、より広範囲に経験を広げていきます。そして「押しつけ」の指導ではなく「共有型（親子、教師と子供達が一緒に活動する）」の活動が大切です。より広範囲に子供達の感覚に刺激を与えるような幼稚園でありたいと、努めています。昭和幼稚園のHPやブログ「幼児教育あれこれ」をご覧ください。 平成30年12月20日 園長 橋田匡邦

